

# 戦後太宰府発展の礎―西高辻信貞宮司―

にしたかつしのぶさた

天満宮の参道はいつも大勢の人が通り、中国語や韓国語など耳慣れない言葉も飛び交っています。道の両側には九州国立博物館の特別展の垂幕がずらりとさがり、梅ヶ枝餅の香が漂います。通る人もまばら、初夏には道に梅を干していた。ナンテ時代があつたことは想像もできません。

太平洋戦争に敗れ、「神も仏もあるものか」という気風の中、昭和21(1946)年3月、西高辻信貞は戦地より復員しました。6年後には御神忌一千五十年大祭を控えていました。太宰府の町は、25年ごとの天満宮の大祭を機に発展してきました。その復興は若き信貞に委ねられたのです。

復員の翌年信貞は、明治5(1872)年以来「太宰府神社」と称していた神社名を「太宰府天満宮」と改称し、大衆の中に生きる天神信仰を目指し、天満宮の復興と隆盛に邁進しますが、それとともに太宰府のまちづくりにも様々な提言をし、実行しています。

文教都市、宗教観光都市、田園都市という都市像を提唱し、大学の誘致や観光客の誘致、さらには太宰府インターチェンジの誘致に努めます。ことに国立博物館の誘致は、祖父以来の悲願であり、昭和42年、亀井光

福岡県知事・げんのさとしひろ 剣木亨弘文部大臣の談



## 太宰府人物志

資料室だより ⑦

話で、国立博物館の誘致が決まるや、そのための用地として社有地5万坪を寄附し、陳情活動を展開します。

信貞のアイディアの実現に大きな力となったのが、後に初代太宰府市長となる有吉林の之助ありよしりのすけでした。二人は戦後間もなく太宰府の若者達で結成した「新生会」の有力メンバー。この会で、九州帝国大学の竹岡勝也たけおかかつや教授に、太宰府がアジアとの接点にある輝かしい歴史を持つていることなどを教えられ、それが、その後のまちづくりの理念ともなりました。

大宰府研究の基本史料集『大宰府・太宰府天満宮史料』全19巻の発刊を企画し調査研究の援助をしたのも、また姉妹都市扶餘ぶよとの橋渡しをしたのも信貞でした。

そして忘れてはならないのが、昭和30年の町村合併の際、当初計画の筑紫郡南部7か町村の合併が決裂した際、「太宰府」という名をなくしてはならないこと、大宰府の史跡を多く有する水城村と合併することの意義を説いてまわったことです。そのお陰で、現在の太宰府市は歴史の町として全国に冠たる存在であり、将来へのまちづくりの財産を確かなものとしているのです。

公文書館構想調査研究委員会

委員 森 弘子